大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

言語現象雑考 (1) : 最近の日本語から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2013-11-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 下村, 武 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00008090

言語現象雑考(I)
—最近の日本語から—

Notes on the Linguistic Phenomena (I)
— from recent Japanese —

下　村　　武*

Takeshi SHIMOMURA**

(昭和53年9月1日受理)

Summary

New adverb use and bare root connection of adjectives, and phonetical change in the imperative case of a verb, observed in recent Japanese, are investigated for a preparatory stage of scientific approach.

1. 序：生体モデルと言語活動

生体システムについては，さまざまなモデルが提出されている[1]．筆者は、人間の営存への技術的効果の観点から，情報・エネルギー・物質を基礎とする新しい試行的モデルを既に提示したことがある[2]．これは，(i)意識の場の設定，(ii)情報化判定回路，(iii)統合的秩序，等を基本とし，三つの技術のあり方が結論される．また過去の注目すべきいくつかの事実を説明するほか，宗教の資源工学的地位，幸福の形而下的議論を促す[3]．一方，言語行為はその積極的生命活動として帰結され[4]，言語現象の考察に地位を与える．今回は，このモデルの詳論を別稿に譲ることとし，以下，最近の著しい言語上の諸現象について，一般言語学的な分析のいくつかを試み，工学的考察のための予備的資料とする．

2. 形容詞の副詞化

この現象は，もう10年以上も前から関西地方の話しことばに見られるが，近年は東京からのテレビ・ラジオをはじめ共通語にも出現し，今や会話体では，ごく普通の用法になろうとしている．具体例は，今のところ，「えらい」「すごい」(「どえらい」「ものすごい」等の変形を含む) の2例に限るようである．用例には，例えば，①『彼はえらい疲れている』(文章語としては，はなはだ不自然であるが，既に慣れたせいか耳にはさして不自然には聞えない．以下同様)．②『あの山は，すごい高い』③『彼女はえらい優しい娘だ』，等々．これらは，英語の much や very などと同じく，用言にかかる程度を表わす修飾語であるから，本来は，「えらく」「すごく」と連用形でなければならない (関西地方では，もとはウ音便になって，「えろう」(＜えらう)「すごう」が専ら使われていたが，今では老人からも余り耳にしなくなった．例えば，④『これは，えろう深い井戸やな』⑤『今日は，えろう寒(う)おますな』はそれぞれ＞⑥『これは，えらい深い井戸やな』⑦『今日は，えらい寒(う)おますな』，等々)．

*電気工学科
**Department of Electrical Engineering

このように，形容詞の連用形の代りに終止形（より正しくは連体形としたいが）を使って用言を修飾することは，一種の副詞化現象とみなすのが妥当であろうと思われる．転成の過程は，つぎのように考えられる．今二つの類似の表現，『今日は，すごく雨が降ったね』『今日は，すごい雨が降ったね』があるとする．両者の表わす情景には大差なかろうが，修飾効果および表現の具体性では後者がすぐれている．この長所を被修飾語省略の場合にも適用すると，『今日は，すごい降ったね』が生れる．このように，潜在的な名詞の存在（あるいは③や⑥では，後にある名詞の存在）に影響を受けて，この用法が発生したと思われる．なお，連体形には本来体言に準ずる機能があり，しかも一般に文語では，「いと，すこぶる，など程度を表わす体言感の強い語が，大抵副詞として叙述語に先立ち，あるいは叙述語を省いて自分の職能を全うする」[5]ので，その延長線上の語法として符合する．かくて，転成の意識が次第に薄れ，『えらいすみません』などといった純副詞的用法をも生むに至ったと考えられる．そして，これはまた意味と用法の分化にも役立っている．

3．形容詞の語幹接続

関西地方の主に20代以下の話しことばに見られる現象である．具体例をいくつかあげる（カッコ内は共通語）．深（ふか）ない（深くない），長（なが）ない（長くない），大（おお）きない（大きくない），新（あたら）しない（新しくない），安（やす）ない（安くない），寒（さむ）ない（寒くない），白（しろ）ない（白くない）等々．連用形の活用語尾「く」を略し，語幹から直接否定の助動詞「ない」に接続するもので，今のところ，この助動詞につなぐ場合に限られる（「ない」が活用しても形は変らない，「新しなかった」等）．ここでは，仮にこれを形容詞の語幹接続と呼んでおくこととする．関西では格助詞の省略をよく用いるので，この現象は一方において同音異義を生み（例えば，『いたない？』は，板がないか，痛くないか，アクセントまで共通，等々），伝達障害も起きやすいが，今では若い世代のほとんどがこの形式を利用している．

この現象の発生過程には，形容詞のウ音便が関与していると考えられる．すなわち，

ⓐ　安くない＞(ウ音便)　やすうない＞(短縮形)　やすない（音便化した「う」が隠れた存在になる．〰部は語幹に同じ）

ⓑ　白くない＞(ウ音便)　しろうない＞(短縮形)　しろない（同上）

ⓒ　新しくない＞(ウ音便)　あたらしうない＞あたらしゅうない＞(短縮形1)　あたらしゅない＞(短縮形2)　あたらしない（同上，なお「しゅ」が「し」と変るのは，新宿が「しんじく」，宿題を「しくだい」と発音するのに同じ）

ⓓ　甘くない＞(ウ音便)　あまうない＞あもうない＞(短縮形)　あもない．

ⓐはウ列，ⓑはオ列，ⓒはイ列，ⓓはア列に，それぞれ語幹が終る形容詞の代表例である．ⓓを除く多数派ⓐⓑⓒでは，短く発音されると，実質的に語幹から接続したかにみえる．従って，会話的環境では，短縮形が普通であるから，言語修得期にその由来が意識されない場合には，語幹接続と誤認して修得されてしまうことになる．かくて，これを語幹がア列やエ列に終るもの（エ列に終るものは極めて少ないが）まで含めた形容詞すべてに適用して一般化したものが，この形式であると考られる．これは，結果的には共通語の語尾「く」を略すだけであるから，語法としてはウ音便より簡便で，共通語との互換性も高い形式である．

新しい形式が生れた結果，現在では中高年と若年の間で，同じことが二様の形式で表現されるものが生じている（共通語を含めると三様といってもよい）．例えば

(共通語)		(関西地方語)
長くない	→	なごない (<なごうない<長うない)
		ながない (長ない)
暗くない	→	くろない (<くろうない<暗うない)
		くらない (暗ない)

関西地方語の上の行は，それぞれ中高年の，下の行は若年の用法である．同音異義を生む一方，後者のように同音異義を避けうる場合もあり（『黒うない』は『黒ない』キ『暗ない』となる），この面の得失は一概に論じえないが，この形式はウ音便のような語幹変化を伴わないという長所があり，話し言葉では今後大きな勢力を占めていくと思われる．また，これは形式が至って簡単なだけに**2.**と同じく共通語への影響も考えられなくもない．一般に言語現象における変化は，境界条件の変化への適応として主として若い世代から発生するものが多く[6]，このことはここでも妥当するであろうが，音声言語では境界条件の変化の物理的表現に困難を伴う場合が多い．

4. 動詞命令形のイ音便

これは新しい現象でもないが，今までに文法書などにも取上げられていないようであるので，ここに付記しておく．動詞のイ音便は普通連用形において現れるものとされるが，筆者は命令形にもイ音便を立てたいと考える．具体例は「なさる」の一語しか見当らないようであるが，例えば，(読みなさい」は(A)<「読みなさえ」<「読みなされ」，又は(B)<「読みなさいませ」<「よみなさりませ」の「ませ」省略形，のどちらかに由来するであろうが，いずれにしてもイ音便であると考えられる．特に関西では原形式である「読みなされ」(実際には多くの場合『よみなはれ』と発音される）が保存され，「読みなされ」は同輩（又はやや目上も可）くらいまで，「読みなさい」は目下のみと使用対象に区別があり，表現の新旧と形式変化の程度についての通念と合致する．

5. む す び

以上，最近の日本語，とりわけ関西語の中から2，3の新しい顕著な現象をとり上げたが，このような研究をさらに進めてデータを集積し，工学的考察の材料としたい．それはまた生体モデルの展開にも役立つ．

参 考 文 献

1) L. von Bertalanffy : General System Theory, George Braziller (1968) など
2) 例えば〝応用物理を受講して〟昭和50年10月（産経新聞教育部刊〝進学〟昭和50年11月にも一部引用)
3) 最近，現行技術と資源について注目すべき論文が現れた．槌田：資源物理学の試み，科学，**48**，2，3，5（昭和53年)(但し，批判すべき点も少くない)
4) Roman Jakobson 教授の注目すべき関連発言あり．言語の科学，1，東京言語研究所（昭和45年)
5) 折口信夫全集，国語学編（第19巻)，p.363. 中央公論社（昭和42年)
6) 下村：漢字筆順の工学的考察，電子通信学会論文誌，**58**－**D**，12（昭和50年12月)